



慶應義塾大学ビジネス・スクール

アイ アム ソーリー

1976年の初夏、スペインに滞在中の日本人ジャーナリスト有田氏とマドリッド在住10年になる武部氏は、夫人連れでフランスとイタリアに10日間のドライブ旅行をした。有田氏は日本を発つ前に大学時代の友人から武部氏のことを紹介されマドリッドで初めて会った。

武部氏は日本で定時制の大学を卒業後、ほとんど無一文でマドリッドにやって来て、マドリッド大学で2年間スペイン語と美術を学び、観光ガイドなどの仕事を経たあと、数年前に日本とスペインの絵画とスペイン陶器の輸出入店を開き、3年前にはマドリッドの中心街の一画に店を構えるようになった。武部氏は30才を過ぎたばかりであったが、日本食に対して強い執着をもち、スペイン料理店や中華料理店で食事をするときにも醤油や日本製の調味料をもち歩くほどであった。

武部氏はスペイン人が大嫌いだと言い、仕事以外の交際は一切断っていると述べた。有田氏が「スペイン人のどこがきらいなのですか？」とたずねると、武部氏は「そうですねえ、どこと言われても……。まあ、敢えて言えば彼らの我（が）の強いところ、自分の非を認めず、あらゆる方法で言い逃れしようとするところですかね……」と答えた。武部氏は3年程前に、画廊経営のかたわら従事していたガイドの仕事の中に、観光旅行で来た武部夫人と知りあい、2年前に結婚した。武部夫人はスペインの気候、国柄、国民を愛し、スペイン人との交際に積極的であった。

有田夫妻と武部夫妻の旅行は、車の所有者である武部氏が運転し、有田氏はガソリン代を負担するという約束で行われた。スペインの地中海岸からフランスに入り、マルセユ、ニースを経てイタリアに入り、ピサからローマに到着した。航空会社を通じて予約したホテルを見つけるのに一行は非常に難渋し、ようやく発見したホテルの前の通りは営業車しか通れないことが判明したため、ホテルから200メートルほど離れた路上に駐車することになった。有田氏は3カ月のスペイン滞在を終えてパリ近郊に移る途中であり、かなり荷物が多かった。有田夫人はひと月前にスペインにやって来て、スペインとポルトガルの旅行中に買物に精を出したので、有田夫妻の荷物は更に多くなっていた。

このケースは、慶應義塾大学ビジネス・スクールの石田英夫教授がクラス討議の資料として作成した。
〔1977年3月〕

武部氏は数年前に2度ヨーロッパ各地を車で旅行した経験があり、また10年間のスペイン在住の体験からして、一度車の三角窓を破られたことはあるが、車のトランクは一度も被害にあったことがない、と有田夫妻に語っていた。有田夫人は、イタリアにおける泥棒の話のいろいろきいていたし、今回の旅行中に買い集めた品物やみやげもののことを考えると、荷物を全部ホテルの部屋に持って行きたいと思った。有田夫人が「本当にトランクは大丈夫ですか」ときくと、武部氏は「大丈夫ですよ」と答えた。これまでの長途の疲れもあり、ホテルと車の間を二度往復するのも難儀なことであった。有田夫妻はローマ滞在中に必要な身のまわり品と有田氏の取材資料の入った2つの荷物だけをホテルに運んだ。

ローマに2泊して発つ朝、武部氏は駐車場の現場から迂回してホテルの前に車をつけた。トランクをあけると中はカラであった。武部氏は「信じられない」と言い、前夜8時頃にチェックしたときにはトランクの中に荷物が入っていたと述べた。ホテルのフロントは「荷物が戻ってくる確率は低いが、警察に行くといよい」と言った。4人は中央警察署に行き、盗難の届出をし、調書を受けとった。有田氏が盗難物件を思いだしながら英語で申し立て、武部氏がそれをスペイン語に通訳した。イタリア語しかしゃべらない係員にもスペイン語はほとんど通じるようだった。有田氏の記憶にのぼった盗難物件の取得価額は約50万円にのぼり、それまでに撮った8ミリと35ミリのフィルムも30本くらい入っていた。係官は「イタリア人は観光国として自分の国の評判が悪くなることをおそれるから、あまり悪いことをしないのだが、外国人がこういうことをするので、困ったことだ」と述べ、もし盗難品がでてきた場合には日本大使館に通知すると言った。日本大使館に行くと、受付の日本女性は「ローマでは外国ナンバーの車の95%はトランクをあけられるということです」と述べた。有田氏は日本語で盗難届を書いてから、大使館員に面会を求めた。年配の参事官は「お気の毒です。日本人はよく盗難にあっているようです。でも車ごと盗られなくてまだよかったですね」と語った。

ひるごろ一行はナポリに向けてローマを離れた。有田夫人はほとんどすべてを失って打ちひしがれていた。車中、有田氏はふと日本を発つ前に加入した保険のことを思いだした。有田氏は航空事故の生命保険に加入しようとして米系保険会社の販売員に会ったとき、すすめられてパッケージ保険に加入したはずであり、それには疾病、傷害とともにたしか盗難も含まれていたはずだ……。保険証書自体が盗まれたスーツケースの中に入っており確かめることはできなかった。盗難発見後何時間もしてから保険のことを思いだすといううかつさであったが、車中の滅入ったムードからのがれるすべにもなろうかと、有田氏はすぐに自分の「発見」を口にだした。武部氏はそれを聞いて、「不幸中の幸いでしたね」と答えた。

その夜、治安の悪さではヨーロッパで最高といわれるナポリのホテルの一室で、有田氏はその日の出来事をあれこれ考えていた。武部氏は有田氏の求めに応じて、ホテルのフロント、警察署、大使館とキビキビと動き、英語の通じない所ではスペイン語で「通訳」してくれた。武部氏のヨーロッパ旅行の経験ではトランクの中からの盗難は一度もないこと、マドリッドでもいつも路上駐車しているけれどもこういう経験は一度もないという前から聞いていたことを再び耳にしたけれども、武部氏は「すまない」とか「申し訳ない」とは一度も言わなかった。スペイン在住2年余りになる武部夫人は、武部氏が席を外した折りに、有田夫人に対して「責任を感じずわ、私にできることがあるなら言ってください。何でもしますから」と二度述べたのを有田氏は聞いた。

有田氏は2～3日前の車中の会話で武部氏の語ったエピソードを思いだした。

「外国に長くいる連中はみな変わっていますよ。私なども日本人から『変っている』といわれますが、外国に住んでいる以上当然のことをしているだけなんですけどね……。

「フランスにいる私の友人にこんなのがいます。或る日、彼は酒の席上で、フランス人の友達と口論したんですが、翌日、二人が出会った時、私の友人は『やあ、きのうはぼくが悪かった』とフランス人に言ったんですね。すると、そのフランス人から『そうだよ、君が悪いんだ』という答えが返ってきた。それを聞いて激怒した日本人はフランス人をぶんなぐったんです……。

ヨーロッパ人は決してひとに謝らないといわれるが、スペイン人はどうかという有田氏の問いに対して、武部氏は答えた。「同じです。ほんのささいなことについては、『失礼』とか『すまない』とか日常的な会話でひんばんに使いますがね……」

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

不 許 複 製

慶應義塾大学ビジネス・スクール

Contents Works Inc.